

百聞は一見に如(し)かず

アニマルフォトグラファー

トラベルライター

平 岩 雅 代

ひとくちに“アフリカ”といっても、その大きさはどれくらいかを即座に答えられる人は、さほど多くないのが現実です。

日本の国土面積は37万8,000平方キロメートルですが、アフリカ大陸の面積は3,030万平方キロメートル。つまり、アフリカは日本の約80倍の大きさということになります。

さらに「ではアフリカの国の数は全部で何か国でしょうか?」と質問をしますと、自信なさそうに「30か国くらい?」「いや、もっと少ないのでは?」という答えが返ってきます。

正解は53か国。現在も王制をとっているモロッコやスワジランド、レソトなどの国々もありますが、その他はほとんどが共和制の国々です。国名を変えた例(ローデシアからジンバブエへ、ザイールからコンゴ民主共和国へ、ダオメからベナンへ、オートヴォルタからブルキナファソへなど)もあり、「学生時代にはアフリカの地図にそんな国々の名は載ってなかったよ」という人もいることでしょう。

次にほとんどの日本人がイメージしているのは「アフリカは暑い」ということです。

確かにサハラ砂漠や、エジプト、カラハリ砂漠などでは、日中の気温が摂氏40度を上

回り、猛暑、酷暑という表現がぴったりです。

ところが、赤道直下にありながら、寒い時にはセーターや皮のコートを着たり、暖房が必要になる地域も存在するのです。

東アフリカの表玄関と称されるケニアは、国土の大部分が海拔1,000メートルから2,000メートルの高地です。首都ナイロビは海拔1,700メートルの高原都市のため、日射しは強烈ですが、木陰に入れば冷んやり心地良い風が吹いています。日本やアジアのように高温多湿でベタベタと汗をかくことがほとんどなく、夏の軽井沢のようにさわやかな気候です。

実際、ナイロビの街を行く人々の服装は半袖シャツ姿あり、セーター姿あり、背広姿あり、と十人十色です。早朝や夜は毛糸の帽

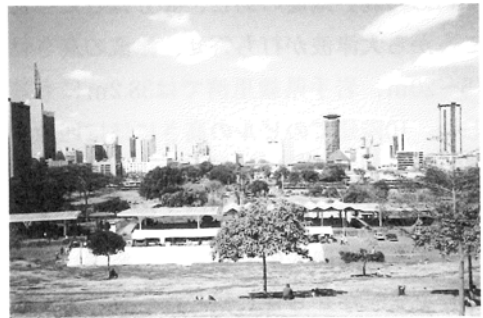


写真1 高層ビルが林立するケニアの首都ナイロビ

子をかぶったり、何枚も重ね着をしている人もいます。

ケニアには四季はなく、乾季と雨季が年に二回繰り返されます。一般に4月から6月が最も雨が多い大雨季、10月から11月が雨が少ない小雨季で、それ以外の12月から3月と、7月から9月が晴天の続く乾季になります。

現地が最も寒い7月には、日本の冬の寒さに慣れている日本人ですら朝ベッドから出る時にセーターやフリース素材の上着が欲しいと思う程冷えます。

サバンナ(草原)に暮らしている野生動物だって、人間と同様に朝晩の冷え込みは身に凍みるようで、太陽が顔を出してしばらくの間は、活動が鈍く、日光浴をして体温が上昇するのを待っています。

日の出とともにサファリカーを走らせ、目覚めたばかりの野生動物に出会う”早朝サファリドライブ”の出発は、午前6時半頃です。まだ薄暗く、明けの明星が輝やく東の空に、朝焼けが広がり、大きな太陽が地平線から顔を出す瞬間は素晴らしく、眠いことも寒いことも忘れてしまうほど。

サバンナの彼方を指差すサファリカーのガイドの「エレファント」の声に、目を凝らして見ますと、リーダーの母親ゾウに続いて、群れが一直線に歩いて来るのがわかりました。

立派な白い牙を持つリーダーのすぐ後ろに続くのは、幼い子ゾウ。よく見ますと、おとなたちに前後を挟まれるように子どもたちが守られています。陸上で最も大きく、天敵がいらないといわれるアフリカゾウでさえ、子どもたちは常に守られているのです。



写真2 子どもを守るように移動する
アフリカゾウの群れ

サバンナで草を食むシマウマやヌーも、早朝は地面に座っていたり、じっと立ったままの姿でいます。

岩場に目をやれば、マングースの家族が身を寄せ合っています。

ケニアでは”動物園”や”サファリパーク”のように、動物が檻や柵に入って飼育されているところではなく、広大な面積の”国立公園”や”動物保護区”の中で、野生動物が弱肉強食の自然のルールのもとに生きています。どれくらい広い国立公園かといいますと、日本の大阪府と同じくらいの面積だったり、四国全体よりも大きかったりします。

人間が”車”という檻に入って、広々としたサバンナを自由に歩き回るライオンやゾウ、チーター、サイ、カバ、スイギュウ、キリン、シマウマ、ヒョウ、ガゼルなどの中に”お邪魔”し、野生動物たちの暮らしぶりを拝見させていただく、それがサファリドライブなのです。

何んでもあてはまることですが、先入観や想像だけで判断するのはたいへん危険です。「百聞は一見に如(し)かず」という慣用句がありますが、冷静に物事を判断したいものです。